

# ドイツ占領期のフランス農村における 2人の女性教師

——回想録と「ノート」の紹介——

天 野 知恵子

## はじめに

19世紀末から20世紀前半、第三共和政期のフランスにおいては、数多くの公立初等学校で女性教師たちが活躍した。ライシテを特徴とする無償の公教育を定めたフェリー法（1881-82年）が施行された後、ほどなくして教壇に立った女性たちを女性教師の第一世代としてみよう。世紀末の農村部で、彼女たちは時に村の司祭や住民たちから冷ややかなまなざしを向けられながらも、初等教育の定着に貢献した<sup>1)</sup>。だが彼女たちは結局のところ、教え子や我が子を第一次世界大戦に送り出す悲運を味わうことになる。

戦争に行った兵士たちを夫や兄弟にもつ第二世代の女性教師たちもまた、苦労が絶えなかったであろう。働き盛りの時期に戦争の影響をもろに受けたばかりではない。教育の現場でもなお、さまざまな困難を抱えたからである。たとえばへんびな山村部では、村人の教育への関心が依然として低く、子どもを学校に来させるのにも苦心したというエピソードが残されている<sup>2)</sup>。

それでは、第一次世界大戦をたたかった兵士を父親として生まれ、第二次世界大戦の開戦前後に教職に就いた第三世代の女性たちはどうだったのであろうか。いかなる少女がどのようにして教師となったのであろう。先の世代と比べて違いはあるのだろうか。また何より、戦争と占領という厳しい時代を、彼女たちはいかに受けとめ、どう生きたのであろう。以下では、そのような問題関心から文献調査を進める中でめぐりあった2つの資料を取り上げてみたい。

一つは、1915年生まれのジャンヌ・ルウエデ Jeanne Lehuédé の回想録である。4歳で父を失い、努力して教師となった彼女が、老後インタビュー

にこたえて自らの人生をふりかえる形でまとめられたものである。幼児期や初等学校の思い出から始まり、女子師範学校での生活や教師になってからのあれこれがわかりやすく語られている。もう一つの資料は、1920年に生まれたドウニーズ・バルデ Denise Bardet の「ノート」である。彼女もまた9歳でかつて兵士だった父をなくしたが、勉学に励んで教師になった。「ノート」はその直後から書き始められ、自身の内面や社会のあり方に関する考察や、フランスを占領したドイツに対する複雑な思いをつづっている。二つの資料は性格の異なるものであり、同列に扱うことはできない。だがともあれ、第三世代の女性教師を知る手がかりとして興味深いと思われるので、まずは紹介してみたいと思う。

## 1 ジャンヌ・ルウエデ

### (1) その生い立ちと戦争開始までの日々

ジャンヌ・ルウエデ(旧姓オージェ Augé)は1915年、フランス西部ヴァンデ県の小都市レ・ゼルビエ Les Herbiers で生まれた。父は馬車塗装工で、第一次世界大戦に出征し生還はしたものの1920年にこの世を去った。そのためジャンヌには父の記憶があまりない。戦争未亡人には認定されず困窮した母は、下宿屋を開業して家族の生活を支えることにした。母の下宿屋には、ポルトガルやイタリア、さらにアルメニアや中国やヴェトナムから来た労働者が集まり、とても賑やかで楽しかったという<sup>3)</sup>。戦後ならではの光景だったのであろう。読書好きで音楽や体育も得意だったジャンヌは、初等学校での勉強を難なくこなし、初等教育修了試験では *très bien* の成績で合格している<sup>4)</sup>。

勉強を続けたかったが小学校には高等科がなかったため、ジャンヌは小学校教師に特別の授業をしてもらいながら1930年に初等教員免状 *brevet élémentaire* を取得した。その時点で働くこともできたのだが、さらに上をめざした。そして1932年に、県の中心地ラ＝ロッシュ＝シュル＝ヨンにあった女子師範学校に合格した。定員20人のところ125人の応募者がいた中で、7番の成績であったという<sup>5)</sup>。

師範学校での3年間の生活は思い出深いものであったようで、彼女はたくさんのエピソードを紹介している。20人の同期生はあつひ絆で結ばれ、苦楽を共にした。朝は6時半に起床し、午前中は8時から正午まで、午後

は4時間授業があった。夕方も2時間勉強した。勉強は厳しく、成績不良で退学を命じられた生徒もいたという。ジャンヌの母は、授業がない木曜午後に娘を教会にやるよう申し込んでいたが、ジャンヌは勉強時間を確保するため、教会に行くのをすぐにやめてしまった<sup>6)</sup>。授業内容は多彩で、体育も学んだ。1年次から初等学校での教育実習も行った。師範学校の校長ははばひろい教養をもった女性で、心理学や社会学、哲学の教科を担当しただけでなく、新しいロシア音楽を紹介したり、夜中に生徒たちを起こして流星群を見せてくれたりしたという<sup>7)</sup>。

楽しい企画も設けられていた。2年生が中心になる学園祭でジャンヌたちは「中世」をテーマに取りあげ、道化に扮して詩歌や曲芸を披露した。また1935年7月、3年次最後の夏休みには、同期一同と教員が鉄道でイタリアに旅行に出、北部中部の各都市を回った。ヴェネツィアでは、 gondolaの上で合唱して拍手喝采を浴び、同期のマスコットだった道化人形をもちだして、別れを告げながら皆で運河に沈めたりした<sup>8)</sup>。

とはいえジャンヌは、師範学校の生活をふりかえり、「規律はおそろしいもので、つねに監視されていた」と語っている。「私たちの学校は充分、修道院に匹敵するところだった。」<sup>9)</sup>それでも半世紀前と比べると、規律は緩和されてきたのだという。ラ＝ロッシュ＝シュル＝ヨンの女子師範学校が創設されたのは1884年であったが、当初は起床時間がさらに一時間早く、生徒には黒い制服が義務づけられ、外出も月一度、親同伴でしか許されていなかった。その後制服は廃止されて服装は自由になった。また年に一度は、女子と男子の師範学校の生徒たちが交流する機会も設けられた。それでもジャンヌの在籍時、生徒の交友関係は厳重に管理され、生徒宛の手紙はみな開封されて中をあらためられたのである<sup>10)</sup>。

同期で卒業したのは入学した20人のうち17人であった。この中で少なくとも2人は、結婚して教職に就くことはなかったという<sup>11)</sup>。ジャンヌ自身は、1935年に故郷レ・ゼルビエから10キロほど離れた小さな村の公立初等学校に赴任した。クラスは一つだけで、男児ばかりに女児一人という構成である。というのも、他の女の子たちは8キロ離れた私立の学校に通っていたからであった。ヴァンデ県のこの地域では、1905年の政教分離法以来、男児は公立学校、女児は私立の学校に通うという慣習ができていた<sup>12)</sup>。

たった一つのクラスで全教科を担当するのはたいへんであったが、彼女

は生徒の感覚に訴えるような授業を行い、学校行事をたびたび企画した。ジャンヌと村人との関係はまずまず良好であったという。受け持った生徒の一人を、初等教育修了試験に合格させることもできた。また2年目になると、3人の女兒が新たに公立学校に来るようになった。それでも問題はあった。たとえば子どもたちは、学校が休みの木曜ではなく、金曜にカテキズムのため教会に通った。それがこの地域の伝統であり、自分にはその習慣を変えさせることはできなかったとジャンヌは語っている<sup>13)</sup>。彼女はここで2年間で過ごし、月700フランの給料をもらった。そしてこの間に教員適正証(CAP)を獲得することができ、正規の初等学校教員となった<sup>14)</sup>。

ジャンヌは1937年に、母の下宿にかついていた古くからの知り合いで税官吏のアンドレ・ルウエデと結婚した<sup>15)</sup>。彼の勤務先が隣のドー・セーヴル県の中心地ニオールであったため、彼女は転勤を希望し、夫の車通勤が可能なサン・ポンパン Saint Pompain で職を得ることができた。家事はこの時から同居をはじめた母に委ね、ジャンヌは仕事に専念した。早朝から19時まで働いたと書いている<sup>16)</sup>。

ここでも最初は、男児ばかりで女兒は一人だけの単一クラスであったが、ジャンヌはクリスマス会や遠足など多彩な学校行事を企画しながら子どもたちの心をつかんでいった<sup>17)</sup>。その様子を、ジャンヌはこう語っている。「ほとんどの子どもは農場をめったに離れないので、海を見たことがなかった。そうした遠出の日々には自分たちとは別の世界を発見することができ、好奇心を目覚めさせた。」<sup>18)</sup>努力の甲斐あってか、この学校でも初等教育修了試験まで導いた生徒はみな合格させることができたし、女生徒の数も年々増えていった。こうした事実から、ジャンヌは創意工夫によって子どもたちに学校を楽しいと思わせることのできた教師であったと言うことができよう。そしてこの1930年代、公立学校の女性教師がそのような人物であれば、カトリック色の濃い西部の農村においても村人の信頼を勝ちえることができたのであろうか。この学校で過ごした4年間は幸せであったと、ジャンヌはのちに語っている<sup>19)</sup>。

## (2) ドイツ占領期の思い出

1939年、戦争が始まった。最初は何事もなかったが、ドイツ軍の侵攻が始まると多数の避難民が押し寄せた。住み着く人もいて、その子どもた

ちの教育が必要になった。ジャンヌのクラスはいつときは40人以上にふくれあがり、退職教員や師範学校生に応援を求めてしのいだ。夫のアンドレは動員されたが、休戦の後幸いにも帰宅することができた。だがこの村にもドイツ兵がやってきた。そして農場の害虫退治に年少の学童をかり出したりした。ジャンヌは小さな子どもたちには休息が必要だから無理だと抗議したが、聞いてもらえなかった<sup>20)</sup>。

1941年にジャンヌは転勤で、ドゥー・セーヴル県の新たな勤務先に移動する。ラバの市が立つので有名なシャンドニエ Champdeniers であった。ジャンヌはここではじめて女兒の学校に任じられた。しかしながら公立の初等学校は、すぐにドイツ軍に徴用されて兵舎にされてしまう。そのため別の場所にあった女兒の私立学校の校舎を借りて教育が行われた。朝にはそこで公立学校の男児が、昼には公立学校的女児が、夕方には本来の私立学校女児がそれぞれ授業を受けるという取り決めができ、2ヶ月の間そうした状態が続いた<sup>21)</sup>。占領期のフランス農村でこのような工夫がなされていたというのは、興味深い事実であろう。

ジャンヌは自宅にも、2人のドイツ兵を宿泊させることを命じられた。彼らはやがて去っていったが、その際、若い方の兵士が「奥さん、戦争終わりだ。ドイツ、だめになった」と言い残していったのをジャンヌは記憶している。彼は状況をよく理解していたのだった。東部戦線に送られることになったのである<sup>22)</sup>。

ドイツ占領期は、恐怖と隣り合わせの日々であった。「占領下で強制をかわすため、時にはできる限りのことをしたとしても、私たちはいつも用心し、背を丸めていなければならなかった。」<sup>23)</sup>ドイツ兵が標的をさがして巡回している時はとりわけ危険であった。女中と共にこっそり英米旗を作っていたお屋敷の老婦人が、見つかって拘禁された。また知り合いの女性教師の夫は、帰省のため自転車で村の中を走っていたところをあやしまれ、連行されて殺害された<sup>24)</sup>。それでもジャンヌは、あえて危険を冒すこともしている。あからさまなユダヤ人迫害に直面したことはなかった中で、数日間思い切って「知人」をかくまった。さらに、レジスタンスの青年が殺害された時には、その葬式に出席した。この時彼女は、殺された青年の仲間がひそかに武装して列席しているのに気づき、肝を冷やしたという<sup>25)</sup>。

他方で、食べるには困らず、闇市に頼る必要はなかった。むしろ都市部

の親戚や友人に、あの手この手で食糧を届けた<sup>26)</sup>。また、夫が仕事の必要  
上ガソリン券をもらっていたので、学校が休みの木曜の午後には車に同乗  
してあちこち回ることができた。それが緊張をほぐす気晴らしであったと  
いう<sup>27)</sup>。

1944年には連合軍による爆撃の犠牲者が出はじめ、家族や知人の安否  
を気遣うようになった<sup>28)</sup>。6月にジャンヌは、初等教育修了試験の審査員  
の一人に任命されてニオールに出張したが、そこでも悲痛な経験をした。  
駅が攻撃され、試験を受けに来た生徒の一人が13歳で命を落としたので  
ある<sup>29)</sup>。

戦争の思い出話の最後を、ジャンヌは次のように締めくくっている。

戦争は子どもも無辜の人も容赦しない。それは偶然に襲いかかるや、  
家族や命をふみにじってしまう。まだ始まりかけの命だろうが、もう終  
わろうとしている命だろうが。戦争のあとには、恐怖と悲しみしか残ら  
ない<sup>30)</sup>。

幸いにも戦争を生き延びたジャンヌは、1947年に男の子を出産して新  
たな人生を歩み始めることになる。だが彼女の紹介については、まずはこ  
こまでとしておこう。

## 2 ドゥニーズ・バルデ

### (1) オラドゥール＝シュル＝グラヌの女性教師

ドゥニーズ・バルデ Denise Bardet は1920年6月10日に、フランス中西  
部オート・ヴィエンヌ県ヴェルヌイユのポワニャックで生まれた。県の中心  
地リモージュから15キロ程離れた村であるという。両親は農民であった  
が、やがて母方の祖父母の土地ラ＝グランジュ＝ド＝ブイユ La Grange  
de Boeil に移り住んだ。父親は第一次世界大戦で出征し、生還はしたもの  
の毒ガスで身体を壊しており、1929年に死亡した。その時ドゥニーズは  
9歳、弟のカミーユは3歳であった。母はその後農業を続けながら女手一  
つで姉弟を育てた<sup>31)</sup>。

ドゥニーズは勉強好きで、遊びの時も学校ごっこをしていたという少女  
であった<sup>32)</sup>。初等学校を終えると1932年から5年間、女子高等小学校の

寄宿生として過ごした。後の語り草になったほど優秀で、とりわけ数学とフランス語が得意だったという。1937年にリモージュの女子師範学校を受験し、400人中20名合格という狭き門をくぐり抜けて入学すると、そこで3年間を過ごした<sup>33)</sup>。そして1940年9月にオート・ヴィエンヌ県シェロナック Chéronnac の教師に任命された。10月にはもう、CAP の審査に難なく合格している<sup>34)</sup>。

その頃からドゥニーズは、ノートにさまざまな思いを書き留め始めた。「これを何と名付けよう？ 日記？ 否、腹心、友人だ。私は自分のうちにあふれ出るものをここにしばしば注ぎ込むだろう。」<sup>35)</sup> ノートには、日々のさまざまな出来事というよりもむしろ、自身や社会について彼女がおりにふれ考えたことがつづられている。それでも時には歴史的な証言が記されており、たとえば1941年6月20日には、「リモージュにペタン元帥が来る。美丈夫の老人でとても若々しい。20歳は若く見える。足取りにもかなり威厳がある。リモージュの人びとはとても熱狂している」と書いている<sup>36)</sup>。

学校での出来事に関しても、細々とした具体的な出来事はほとんど記されていない。生徒たちを冷静に観察して、次のように書き留めている。「教育学。たいへん興味深い。私の小さな生徒たちは多くのことに対して目覚めているが、私はもう違いも感じている。ある子は他の子よりゆっくりだろう。また、一所懸命やっていて課題にはつねに取り組むであろう子たちもいれば、支離滅裂でだらしないいつも粗忽であるだろう子もいる……」<sup>37)</sup> 彼女はさらに、教師としての自分自身にも分析を加えている。「私は大きな子の方が好きだ。まだ幼いこの子たちは、私の精神には合わない。というのも私は母性的でないから。この子らに対しては、とても優しくゆっくりと辛抱強くなくてはいけない！」<sup>38)</sup>

彼女のノートのほとんどを占めているのは、哲学書を読みながらあれこれ巡らせた抽象的な思索である。とりわけドイツ哲学に関心があつたようで、ドイツ語をよく理解できたかどうかはわからないが、好んでニーチェを読んでいた。彼女はしかし、読書ばかりで内こもる生活をしていただけではない。自然を愛し、散歩や遠出が好きで、友と語り合ったりした。友人ふたりと自転車で遠乗りに出かけた日には、城跡や教会を巡り、草の上で昼食や仮眠をとり、良い一日であつたと記している<sup>39)</sup>。

ドゥニーズはその後希望してオラドゥール＝シュル＝グラヌ Oradour



-sur-Glane の学校に転勤する。オラドゥールは母の住むラ＝グランジュから3キロしか離れておらず、母の家から自転車で通うことができたからである<sup>40)</sup>。

ドゥニーズ・バルデは、戦争の時代を生き延びることはできなかった。

彼女の24回目の誕生日であった1944年6月10日の土曜日、弟のカミーユが師範学校の入学試験に合格したという喜ばしいニュースも加わり、バルデ家では祝いの夕べになるはずであったこの日、ドゥニーズは午前の授業を終えると、昼食のため自宅にいったん帰ってから再び出勤した<sup>41)</sup>。

午後、オラドゥール＝シュル＝グラヌにドイツ SS 第二装甲師団ダス・ライヒの部隊がやって来た。彼らは学校にいた教師と子どもたち全員を、村にいた女性や子どもたちとともに教会に集めた。そして教会に発火物を持ち込み、火を放ちながら中にいる人びとに銃撃を浴びせた。その結果、246人の女性と207人の子どもの命が奪われた<sup>42)</sup>。村にいた男性たちも、いくつかの納屋に集められて銃撃された後に焼かれ、189人が犠牲となった。こうして、この日オラドゥールでは642人が虐殺された<sup>43)</sup>。

その中にドゥニーズ・バルデもいた。焼け落ちた教会の中、彼女の遺体は祭壇付近で生徒に手をさしのべた状態で見つかったと語られることもあるが、検証はされなかったようで、詳細はよくわかっていない<sup>44)</sup>。

母の嘆きはどれほどであったろう。ドゥニーズは実家から通うことができるというのでオラドゥールへの転勤を希望したのであるから。ドゥニーズのものはみな手つかずで残された。「ノート」はその中から発見されたのである<sup>45)</sup>。

以下ではこの「ノート」からの抜き書きをいくつか紹介する。彼女の知性や教養や洞察力、また生に対する意志をよく示していると考えられる部分を、筆者が整理して選び出した。コメントは付さずに訳出する。

## (2) ドゥニーズ・バルデの「ノート」断章

私は、本当はこのノートにそんなにしばしば意中を打ち明けているわけではない。というのも私は、感じることに食欲なあまり考える時間がないからだ。私は自然の美をたっぷりと享受する動物のようだ。自然は美しいのだから。私は今みたいにはそのことに気づかないでいた。実は私はとても農民的な気質をもっている。そして自然に生きる農民とは、それを熟視したり傾聴したりすることによりあまり気をつかわ



ないものだ<sup>46)</sup>。

自分自身に対して、その思想、その感情において、そして他者に対して、他者との関係において、他者に対してもつ感情において実直であること……徳のすべてがこの言葉に包摂される。誠実さ、正義、威厳、慎み、ひかえめ、時には献身も。これらは実直さのいくつかの形態だ。他にもあるだろう。潔癖も実直さの一つの形だ。

もし私が取り入れるべき標語、従うべき理想を持つとするなら、それがこれだ。実直であること<sup>47)</sup>。

「自由な人間は非道徳的だ。」(ニーチェ)「自由な人間」によってニーチェは何を意味したかったのだろうか。何からの自由？ ……

ニーチェは非道徳的ということによって何を言わんとしたか？ 非道徳的とは「道徳に反する」ということだ。この道徳という言葉の意味についてはさらに議論することができよう。だが長々と言うことはやめよう。理性ある人びとがこの言葉に与えている意味を与えよう。つまり、道徳とは善であることだ。ところが私は、この社会で可能な限り自由な状態にあるような人間が、善に逆らうなどとはまったく理解できないのだ<sup>48)</sup>。

ナチの野蛮さとドイツとを混同してはいけない。不滅のドイツとつかの間の主を区別するには、ベルネやビュヒナーやハイネをフランスで読まなくてはならない<sup>49)</sup>。

ドイツにおけるヒューマニズム。筆頭に来るのはデューラー、J. S. バッハ、シラー、ベートーヴェン、レッシング、ゲーテ、カント、ヘーゲル、ハイネ、マルクス、ヘルダーリン、ニーチェ、ワグナー、トーマス・マン。

ところがヒトラーは、1933年にヒューマニズムに対して戦争を宣言した。「哲学者はすべて、ある民族の生命という目的や概念との関わりによってだけ理解される。」……あらゆる人間的な価値、あらゆる真実の否定だ。国家の政治的目的に文化を従属させることだ<sup>50)</sup>。

ヒトラー主義というのは過去を後ろ盾にしている。偉大なヒューマニストたちの思想さえそのゲルマン的伝統と無縁ではなく、ヒトラー主義はヘーゲルやワグナーやニーチェを引き合いに出す。(しかし、そうした人びととヒトラーのイデオロギーとの間には、レヴェルや質に巨大な違いがある。後者は粗野な物質的目的のために、前者の思想のもっとも持続性のない側面だけを役立てようとする。)<sup>51)</sup>

私たちフランス人はドイツと戦争状態にある。フランス人は態度を硬くして不正さえ厭わないようにしなくてはならず、抵抗に耐えるよう憎しみを抱く必要がある……それでも、私たちの敵ではないドイツを愛し続けることは容易だ。人間的で美しい調べを奏でるドイツを。というのもこの戦争では、ドイツ人はその最初の武器を、自らの詩人や音楽家や哲学者や画家や役者たちに向けたのであるから……フランスにおいてしか、ハイネやシラーやゲーテをおそれずに読むことはできない。

……私は断言したい。私たちは、この本当のドイツ、そのために闘っているのだと<sup>52)</sup>。

私は神を信じたい。でもそれはできない。科学が私たちにそうすることを妨げているから。それにもし神を信じるのであれば、良き神でなければならない。だが良き神なら、その子どもたちがこんなふうに苦しむのを放ってはおかないだろう。

否、生きることは私には神秘だ。生は愛と苦悩で作られている。人は愛し苦悩する。苦悩し愛さなければならない。私はといえば、愛の中で、あらゆることへの愛の中で生きる必要があると感じている。愛すれば、何事にもひじょうに深く、ひじょうに現実的に浸透していく。それは憎しみを排除しない。それどころか！ それは怒りを排除しないと私は言いたい。けれども私は、愛とともに生きるべきだけにしか、善をなせる気がしないと言いたい。

……

なぜ愛さなければならないか？ わからない、不思議だ。  
だが愛は光のようなものだ<sup>53)</sup>。

## 注

- 1) Michelle PERROT, *Mon histoire des femmes*, Éditions de Seuil, 2006, pp. 171–172. 松田祐子「女性の職業パイオニア——フランス第三共和政前半の女性小学校教師」『パブリック・ヒストリー』第15号（2018年）など参照。
- 2) 長谷川イザベル・長谷川輝夫『共和国の女たち——自伝が語るフランス近代』(山川出版社・2006年) および Émilie CARLES, *Une soupe aux herbes sauvages*, Robert Laffont, 1981 など参照。
- 3) Sylvine REY et Jeanne LEHUÉDÉ, *À l'école de Jeanne : mémoires d'une institutrice de campagne*, Geste éditions, 2006, p. 18.
- 4) *Ibid.*, pp. 11–39. ジャンヌは4人きょうだいの末っ子であったが、兄姉のうち次兄は乳児期に、他の2人も20歳代にいずれも病没している。*Ibid.*, pp. 43–44, 105–108.
- 5) *Ibid.*, pp. 39–42, 45–46.
- 6) *Ibid.*, pp. 48–49, 54.
- 7) *Ibid.*, pp. 47–48, 61–64.
- 8) *Ibid.*, pp. 60–61, 68–69.
- 9) *Ibid.*, p. 65.
- 10) *Ibid.*, pp. 65–67.
- 11) *Ibid.*, pp. 69, 97.
- 12) *Ibid.*, pp. 71–75. この時受け持った唯一の女生徒は、体が弱く8キロの通学に耐えられない子であった。
- 13) *Ibid.*, p. 79.
- 14) *Ibid.*, pp. 75–76.
- 15) *Ibid.*, pp. 81–87. 女性教師がどのようにして結婚相手を見つけたのかという点は興味深い。ジャンヌの場合は、子どもの頃からよく知っていて安心できる人物を選んだ。アンドレはジャンヌより15歳年上で、結婚直前まで恋愛の対象として考えたことはほとんどなかったという。
- 16) *Ibid.*, pp. 91–92.
- 17) *Ibid.*, pp. 92–95. この時受け持った唯一の女生徒はまだ3歳であったが、母親が働く必要があったので例外を認められた。婚外子だったので私立の学校にやるにはためらいもあり、ジャンヌのクラスに入ったのだという。
- 18) *Ibid.*, p. 95.
- 19) *Ibid.*, p. 104.
- 20) *Ibid.*, pp. 101–104.
- 21) *Ibid.*, pp. 109, 113–114.
- 22) *Ibid.*, p. 114.

- 23) *Ibid.*, pp. 119–120.
- 24) *Ibid.*, p. 119.
- 25) *Ibid.*, pp. 113, 120–121.
- 26) *Ibid.*, p. 115.
- 27) *Ibid.*, p. 118.
- 28) *Ibid.*, p. 121.
- 29) *Ibid.*, pp. 121–122.
- 30) *Ibid.*, p. 122.
- 31) Présentation de Jean BARDET, *Cahiers de jeunesse de Denise Bardet : Institutrice à Oradour-sur-Glane. Le 10 juin 1944*, Le Puy Fraud, 2011, p. 7. ドゥニーズの「ノート」は21世紀になってから彼女の弟の息子の手によって整理され刊行された。それがこの本である。以下ここからの引用に際しては BARDET, *Cahiers* と記す。
- 32) カミュー・メイラン、室井庸一訳『涙と光』（三笠書房・1956年）108頁。
- 33) BARDET, *Cahiers*, p. 8.
- 34) Jean-Paul PICAPER, *Les Ombres d'Oradour*, L'Archipel, 2014, p. 96 ; BARDET, *Cahiers*, p. 25.
- 35) BARDET, *Cahiers*, p. 25.
- 36) *Ibid.*, p. 34.
- 37) *Ibid.*, p. 25.
- 38) *Ibid.*, p. 30.
- 39) 彼女はまた「路上を走る喜び、それは自由の小さな象徴」だと記している。  
*Ibid.*, p. 35.
- 40) *Ibid.*, p. 16.
- 41) *Ibid.* : PICAPER, *Les Ombres d'Oradour*, p. 95.
- 42) この殺戮を逃れることができたのは、当時47歳だった女性一人だけであった。彼女は後に教会内の様子を伝える重要な証人となった Robert HÉBRAS, *Avant que ma voix ne s'éteigne*, Elytel éditions, 2014, pp. 83–85.
- 43) オラドゥールの虐殺に関しては、先にあげた文献の他に、以下のものを参照した。内堀稔子『失われた土曜日——1944年6月10日虐殺の村オラドゥール』（透土社・1991年）、ロビン・マックネス、宮下嶺夫訳『オラドゥール——大虐殺の謎』（小学館文庫・1998年）、岩切信『オラドールの記憶——ナチスに虐殺されたフランスの村』（草の根出版会・2003年）、関沢まゆみ「『戦争と死』の記憶と語り——その個人化と社会化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集（2008年）、中祢勝美「『記憶の場』としてのオラドゥール・シュル・グラヌー——独仏の和解とEUについて考える」天理大学EU研究会編『ドイツ統一から探るヨーロッパのゆくえ』（法律文化社・2016年）

所収。

- 44) PICAPER, *Les Ombres d'Oradour*, pp. 90–91.
- 45) BARDET, *Cahiers*, p. 18.
- 46) *Ibid.*, p. 28.
- 47) *Ibid.*, p. 29. 「実直である」には *honnête* ということが用いられている。
- 48) ドウニーズはまた「私はニーチェが大好きだ。とはいえ、必ずしもいつもよく理解できるわけではないが」と書いている。*Ibid.*, pp. 31–32.
- 49) *Ibid.*, p. 41.
- 50) *Ibid.*, pp. 45–46.
- 51) *Ibid.*, p. 47. なお文中の ( ) は原文にある通り。
- 52) *Ibid.*, p. 52.
- 53) *Ibid.*, p. 56.